

「人が人に罪を犯しても、神が間に立ってくださる。だが、人が主に罪を犯したら、誰が執り成してくれよう(サムエル上 2:25)」。民の指導者、祭司エリは年老いて(2:22)、粗暴なぐうたら息子に(2:12)頭痛めていた。これは、そんな息子たちを諭す言葉であった(2:23)。実子は当てにならず、血縁ではないサムエルが後継者としてやがて民を率いることになる。

「少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった(2:26)」。あれ、似たようなナレーションを、どこかで聞いたぞ。「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された(ルカ 2:52)」。少年イエスは、少年サムエルに重ね見られるのか。

12歳のイエス(2:42)のふるまいが語られる直前にもこんな記述が。「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた(2:40)」。

幼年期から少年期にかけてのイエスは、どんな人物だったのか。親の庇護から脱し、主体的に行動する少年だった(2:46)。イエスは神の子であっても(2:49)、同時に人間の子として(2:51)特段変わったところもなく、すくすく成長していった。

イエスが神童として描かれている、と勘違いしないでほしい。13歳で成人男子の仲間入りをする彼らにとって少年はその直前、学者たちの「話を聞いたり質問したり(2:46)」することは特異でもなからう。神の子は(2:49)、まぎれもない人間として、幾分賢く、のびのび育っていっただけのこと(2:40,52)。

子供の自由な主体性は親には受け入れがたいようだ。昔も今も変わらないね。幼い頃、私はよく迷子になって母を心配させたが当人は平然としていた。少年イエスのあの感じ、おおそだよ、と思う。

うっかり屋のマリアとヨセフは(2:43)、顔面蒼白で息子イエスを三日間懸命に捜しまわる(2:46)。ようやく見つけて母がヒステリックに叱ると(2:48)、イエスは「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか(2:49)」と、平然と答えている。

「三日間の闇と神の子の現れ」として、ここにも十字架と復活が暗示されているのか。

イエスから千年遡って、少年サムエルの所へ戻ろう。サムエルの成長ぶりが語られるのは(サムエル上 2:26)、「人が主に罪を犯したら、誰が執り成してくれよう(2:25)」という嘆きの答えとして。

人間相互の罪には神の執り成しがありえるが(2:25)、神への人間の罪はどう執り成されるのか。私たちに、私たちの地平で育ち、私たちの地平で十字架にかかったイエスという方の執り成しがある。

「わたしたちはどう祈るべきかを知らないが、“霊”、自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる(マテ 8:26)」。“霊”の執り成しとは何か。

「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に座っていて、わたしたちのために執り成してくださる(8:34)」。私たちの罪のために十字架で「死んだ方」が、神の子として「復活させられた方」が執り成してくださる。

現実においてそれは、「私たち自身として」言葉では掴めない聖霊の呻きをもって執り成される。

すくすく育った少年イエスと、イスラエル最初の王権を導くサムエルの少年期を重ね合わせると、十字架という「執り成し」がくっきり浮かび上がる。そのために神の御子は、この地上にお生まれになった。

クリスマスの奇跡は遠景になり、人間の荒野に“霊”の執り成しが吹き抜けていく。



#### 《おまけのひとこと》

学校帰りの子供たちは道草をくうが 少年イエスの道草は筋金入りだ 親の大雑把がそれを許容している 教会はイエスの家族ほどの弾力がちょうどいい うっかり泣き 思い直していくような